

ISSN 2434-9690

東アジア国際 言語研究

創刊号

東アジア国際言語学会
2020年1月

目次

ごあいさつ	鈴木康之 (i)
[特別寄稿]	
文の材料としての単語と連語	鈴木康之 (1)
名詞と使役動詞 (V-(サ)セル) からなる連語	早津恵美子 (5)
[対照研究]	
構造で作る派生空間詞	高橋弥守彦 (25)
日本語の「を格」、「から格」の空間名詞と自動詞との組合せに対応する台閩語の 連語との比較	施 淑恵 (36)
「ノニ」文と中国語“关联词”訳の対照研究	孫 宇雷 (51)
「習得」に関する動詞の語彙的意味の分析——日中の結果複合動詞を中心に——	蘇 丹 (61)
「のだ」文と焦点・強調的“是”字文との対照研究 — 対訳における 意味伝達と形式選択から—	曹 銀閣 (72)
「飛び+V」と“跳/飞+V”についての一考察	陳 雄洪 (82)
拡張意味単位からみた日中同形語の対照研究—「精神」を例として—	梁 鵬飛 (92)
[日本語研究]	
不可能形式による禁止表現	李 楠 (103)
コーパスに基づく類義語の意味分析の研究—「はがれる、むける」などを中心に—	李 響 (111)
日本語の存在文と所在文の置き換えに関する一考察	鄧 超群 (121)
新聞社説における譲歩表現に関する分析—その談話機能を中心に—	単 艾婷 (131)
日本語の「内の関係」連体修飾節のモダリティについての考察	張 静苑 (142)
類型論的にみる日本語の目的語名詞の定性	魯 美玲 (153)
『萬葉集』にみられるオノマトペ—AB型を中心に(その式)—	王 則堯 (164)
[中国語研究]	
中国語の仮定複文における前後節の関係標識について	新田小雨子 (174)
時量詞構文における焦点について	福本陽介 (184)
歴史的に見た離合詞—“请客”“生气”“见面”—	石井宏明 (195)
小説の地の文における“SV了O”文の成立条件	白石裕一 (205)
現代中国語の数量詞について	洪 安瀾 (218)
“把”構文における可能表現についての再考	小路口ゆみ (229)
位置移動の動詞“过”のスキーマについて	蘇 秋韵 (239)
二空間の質的対立から見た“过”の通過義について—「境界プロフィール」と 「場所プロフィール」に着目して—	佐々木俊雄 (250)
清末北京語動詞の実態—張廷彦『支那語動字用法』と『動字分類大全』に基づいて—	許 辰晨 (261)
2019年月例会発表記録	(272)
編集後記	(274)
執筆者一覧	(275)
英文目録	(276)

「のだ」文と焦点・強調的“是”字文との対照研究¹⁾ —対訳における意味伝達と形式選択から—

A Contrastive Study of the "noda" Sentence and the Focalizing & Emphatic "Shi"
Sentences: From Semantic Transmission and Form Selection in Parallel Translation

曹 銀閣
CAO Yin'ge

提要 本文将带有强调性意义的“是…的”句和“是…”句统称为聚焦式及强调性“是”字句，分析此类“是”字句在信息、态度等传达的意义上与日语的「のだ」句的对应关系。发现不同意义层面的传达，“是”字句和「のだ」句的结构形式会有所不同。

本文将对译中与“是…的”句对应的「のだ」句的意义分为句子焦点信息、一般性特征、确定性内容的强调等三类；将与“是…”句对应的「のだ」句的意义分为特殊性、客观性、真实性、发现性内容等四类的强调说明。并分别分析中日在表达同类意义时两种结构中各自的特点。

キーワード: 「のだ」 “是…”文 “是…的”文 形式 意味

目次

1. はじめに
2. 先行研究
3. 「のだ」文と“是…的”文
4. 「のだ」文と“是…”文
5. おわりに

1. はじめに

日本語の「のだ」文末形式と中国語の“是…的”文とは、構造上に類似しているから、よく対照研究されていた。しかし、対訳コーパスを分析すると、「のだ」と対応する中国語の文“是…的”より、“是”のほうがずっと多い。

一般的には、文の焦点を標記する構造として、中国語の“是…的”が挙げられる。しかし

¹⁾ 本研究は、「上海外国语大学博士研究生国（境）外访学资助」プロジェクトの助成を受けて行われたものである。論文を投稿にあたり、貴重なご指摘ご意見を下さった査読者に感謝申し上げます。

“是”字だけで、または副詞との共用によって、情報を強調する機能も持っている。例えば、次の例のように、“是”によって事柄の側面を強調し、物事に対する態度を伝達する。

(1) 張君が、指導者に批判されたのだ。/(是)小张被领导批评了。(木村2017の例)

(2) 不必再想谁是谁非了，一切都是天意，他以为。/もうこれからは二度と人を恨むまい。なにもかも運命だったのだ。(《骆驼祥子》/立間祥介訳)

(3) 我们是在不断地解决新的矛盾中前进的。/われわれは新しい矛盾を次から次へと解決しながら前進していくのだ。(《邓小平文选第二卷》/訳者不詳)

例(3)のように、焦点・強調の観点から、“是…的”文はモダリティとしての「のだ」と伝達上類似点が多いと思われるが、焦点になる制限が違っている。中国語の例の中の“前进”の状態“在不断地解决新的矛盾中”を焦点になるのが疑いないが、日本語の訳文の「のだ」文には前後文がないと、焦点となる部分は容易に判断できない。

本稿は、“是…的”と“是…”文とともに考察対象として、その中の強調性を有する“是”字文を総称して「焦点・強調的“是”字文」と呼ぶことにする。上に挙げた例のように、伝達された意味と形式の選択との間に関係を明らかにするために、両方の意味と形式上の対応関係とそれぞれの特徴を整理しておきたいと思う。

2. 先行研究

2.1 「のだ」形式に関する中日対照研究の概観

従来の「～のだ」についての研究は、数多くの成果が挙げられる。主として、寺村(1984)、奥田(1990)、野田(1997)、森山他(2000)などがあり、「のだ」を「説明」のモダリティとしてとらえ、前後文の関係付けなど話し手の主観的伝達を表すという点が研究の姿勢である。これに応じて、「のだ」文に関する日中対照研究を概観してみれば、大体“是…的”文を中心に行われていると言える。

しかし、「のだ」文と“是”字文の対訳率に関しては、王(1987)はすでに指摘したように、調査の範囲において、中国語原文の“是…的”文は日本語訳文の「のだ」文と対応できるものがわずかに8.4%という低比率が示されている。

これまで“是…的”文に絞って対照研究を行う原因という点、王(2004:290)では「「のだ」文と“是…的”文との間で類似性が感じられるのは、まさに名詞判断文に由来する説明・判断というモダリティ上の類似点である」と述べ、「事実を模写するのではなく、話し手の説明・判断・提示するなどをあらわすのが、日本語の「のだ」と中国語の“是…的”文の最大の接点である」と指摘した。本稿は、「話し手の説明・判断・提示する」という観点に立てば、“是…”文をも検討対象に加えるべきだと考える。

筆者は、中日対訳コーパス(CJCS)を利用して、中国語テキストに対応する日本語訳

文²⁾における「のだ」形式を調べてみた。断定・肯定の「のだ」を例として検索してみれば、1877例³⁾があるとわかった。その中には、「のだ」に対応するものとして、“是”字文が395例あるが、“是…的”文が61例しかない。

むろん、“是…的”は主な対応形式ではない。また、“是”字文と対応する「のだ」文が“是…的”文より多く見られる。だから、二つの形式をともにとりあげて検討するほうがよいのではないかと考えられる。

2.2 「のだ」文と焦点・強調的“是”字文

中国語における“是”とは、《現代汉语八百词》によると、“[动]主要起肯定和联系的作用，并可以表示多种关系。”⁴⁾と定義されているが、“是”の性質について見分けていない。張(1996)では、“是”の性質について、焦点マークとしての“是”があるとみとめ、それには強調の機能をもっているとも考えられ、またアクセントをつけて読むと、「確認」の意味を表す副詞となると説明している。さらに、徐(2001)では、動詞としての“是”と焦点マーカ―としての“是”とがあると論じている。

一方、柴(1981)は“是”の使用率について調査を行った。氏の調査によると、現代中国語における“是”字文の比率が35%、さらに、“是”字文における“是…的”文の比率は30%となっている、という結果を引き出した。

“是”字文が中国語におけるいかなる重要な存在であるかははっきり見える。また、“是”字文の中には、“是…的”がかなりの割合を占めているが、ほかにはより多く使われているのは“是”字文であることを認めなければならない。

“是”を用いて強調の意味を表す文には、“他是昨天下午进的城。”(彼は昨日の午後町に入ったのだ。⁵⁾)、“(是)小张被领导批评了。”(張君が、指導者に批判されたのだ。⁶⁾)のような“是”によって焦点をマークする構文もあるが、“他是昨天下午进了城。”⁷⁾のような単なる“是”によって“昨天下午进了城”という事態の事実性を提示して強調する用法もある。さらに、“确是”、“原本是”、“正是”などのような「副詞+“是”」の用法も常に評価性あるいは強調性を表している。

上に挙げられた例のように、「のだ」文と対応する中国語には、焦点マークとしての“是”字文と強調の“是”字文が同様に重要なものと見られる。だからと言って、“是…的”

²⁾合計 39 冊の訳文を検索範囲とする。

³⁾この結果は「のだ」を含む段落の数である。実は一つの段落において、一つ以上の「のだ」文を使う場合もあるが、便宜上、段落数をとり上げることにする。

⁴⁾主に肯定と関連の役割を果たし、多様な関係を表すことができる。(筆者訳)

⁵⁾木村(2017)の例

⁶⁾同上。

⁷⁾この文では“昨天下午”が焦点としてマークされるという理解もあるが、“昨天下午进了城”という事態全体に重点を置いて強調する理解もある。

文と強調的“是”字文と両方も考慮に入れて考察しなければならない。

本稿では、こうした強調性を有する“是”字文を総称して「焦点・強調的“是”字文」と呼ぶことにする。態度伝達の観点から、焦点・強調的“是”字文と対応できる日本語の「のだ」文と対照しながら、それぞれの意味・形式上の特徴の相違点を観察する。

3. 「のだ」文と“是…的”文

一般的には、“是…的”文が二種類に分けられる。一つは、過去に実現された動作の時間・場所・方式・動作主・受け手などを説明するもので、構文には動詞が必要となる。もう一つは、主語に対する評価・描写の語気を表すものである（劉 2004）。この二種類とも「のだ」文に対応できる。事柄についてのある側面を強調して、相手の注目を寄せる点で共通だが、意味上の傾向が違っている。

3.1 焦点的情報

“是…的”文について杉村（1982）でそれと「のだ」と平行関係をみせる構文だと考え、“是…的”文がある事態の発生・実現を確証済として、その事態に関与した「5W1H」⁸を補足説明するものであることだと解釈した。この点について、金（2005）で“是”によって焦点となる情報をマークすると捉え、また、情報の焦点が簡単に判断できる場合は、“是”が省略できると考えられる。

(4) 私が彼に来てもらったのです。/我请他来的。（杉村 1982 の例）

野田（1997）に、スコープの「のだ」を考察することがある。スコープの「のだ」によって文の部分が否定・疑問・断定のフォーカスになれる。この点は、文脈によるものである。例えば、つぎの例――

(5) 来找她的并不敢希望她打扮得怎么够格局，他们是按钱数取乐的。/どうせ客のほうだってべつに化粧がどうこういうわけではない。値段相応の楽しみを求めてくるだけなのだ。（《骆驼祥子》/立間祥介訳）

ここで、「化粧」と「値段相応の楽しみを求めてくる」が文脈上に対立しているものであり、「のだ」文によって後者を判断の焦点・フォーカスとして述べるのである。

対訳の述べ立てる文にはこのような文脈に関連する文の部分を焦点にする「のだ」文がそれほど多くないと見える。一般的に、中国語における焦点の標識としての“是…的”は、動作の関連側面の強調である場合は、訳文の日本語には「は…のだ」という「主題 - 解説」の構造で現れる。

(6) 在西安事变中，为张、杨所捉的这一口恶气，蒋介石是用这种方式出了的。/西安

⁸すなわち、「いつ (When)、どこで (Where)、誰が (Who)、何を (What)、なぜ (Why)、どのように (How)」である。

事変の間、張、楊の二人に捕らえられた腹いせに、蒋介石はこんなひどいことをしたのだ。（《我的父亲邓小平(2)》/長堀祐造訳）

- (7) 实现四个现代化是一场深刻的伟大的革命。在这场伟大的革命中，我们是在不断地解决新的矛盾中前进的。/四つの現代化を実現するのは、底の深い、偉大な革命である。この偉大な革命の過程で、われわれは新しい矛盾を次から次へと解決しながら前進していくのだ。（《邓小平文选第二卷》/訳者不祥）

上の例のように、中国語では方式や状態などが明らかに焦点となるが、日本語には容易に見分けられない。つまり、日本語の「のだ」文によって焦点的な情報を提示する場合は一定の制限があり、前文脈がないと容易に判断できない。

この点について、野田（1997）のスコープの「の(だ)」の文についての分析にも触れた。フォーカスの位置について、格成分、様態・頻度の副詞、制限的修飾成分、動詞、ボイス、アスペクト、否定、テンスとムード形式の一部などは基本的に否定などのフォーカスになりうると論じたが、大体は否定の文を典型として説明したものである。断定の「のだ」文によって動作に関連する側面をフォーカスになる際には、形式上傾向がある。「...するのではない。...するのだ」の形式が一般的である。例えば、次の「で」格がフォーカスになる場合の例である。

- (8) どでかい身体の力士たちがそこで全力でぶつかり合うわけだが、通常の格闘技なり競技スポーツと違って、「始め」の号令なり、ゴングなりで始まるのではない。あくまでも力士同士の“あうんの呼吸”で始まるのだ。（野田1997の例）

ここで、「のだ」文をみるだけでは、そのフォーカスあるいは焦点を提示するのは明らかにならない。「のではない」文が先行して、対立のものとして続く「のだ」文が容易にフォーカスを提示することができる。

3.2 一般性特徴

物事の特徴を描写するとき、一般性あるいは普遍性のもつ特徴を、よく“是…的”の構造に入る。この中の“是”と“的”はなくて文が成立できるから、その必要のない成分が付け加えることによって、その一般性特徴の判断・認定の意味が生み出された。このタイプの“是…的”文は、日本語に訳すときに、よく「のだ」文に対応している。

- (9) 时间自己是不爱说话的。/時間って奴は寡黙がお好きなのだ。（《活动变人形》/林芳訳）
- (10) 一切事情都是在发展和变化的！世界上永远没有静止的事物。/すべてのこと柄は、みな発展し、変化するのだ。この世には、永遠に静止している事物など、存在しない。（《青春之歌》/島田政雄訳）
- (11) 革命是长期的、艰苦曲折的。/革命とは、長期の、曲りくねった、困難な道なのだ。（《青春之歌》/島田政雄訳）

- (12) 道路是死的，人心是活的，在入棺材以前总是不断的希望着。/さきには死しかないとわかっている、人の心は生きているのだ。棺桶にはいるときまでは希望をもちつづけなければいけないのだ。（《骆驼祥子》/立間祥介訳）

「時間」「すべてのこと柄」「革命」「人の心」はそれぞれ一般性特徴を持っている。それらの一般性特徴を“是…的”や「…のだ」で表すことができる。しかし、日本語に一般性特徴を表す形式には「のだ」形式だけではない。次の例の示すように、「ものだ」に対応することもできる。

- (13) 苦人是容易死的，苦人死了是容易被忘掉的。/貧乏人は簡単に死んでしまうものだ。死ねば簡単に忘れさられてしまうものだ。（《骆驼祥子》/立間祥介訳）

ここに挙げた例に示すように、「もの」は形式名詞として、実質的な意味を持っているが、「のだ」の「の」には実質的な意味を持っていない。「のだ」の抽象化がより高いため、話し手の心的態度を表す程度が高いと考える。

3.3 確定性内容

「実際」・「実」などの副詞なものと共起するときには、「のだ」によって内容を総括する用法がある。そういう状況には、中国語の“是…的”に対応している。こういう“是”と“的”は構文上には必要としないもので、主な機能は文の内容の判断と確認、そして伝達する機能である。

- (14) 实在，我是非常关心你的。/実際のところ、わたしは、きみのことが心配でならないのだ。（《青春之歌》/島田政雄訳）

- (15) 他成天价唬着个脸，叫人见了害怕，岂不知他心里是害怕人的。/四六時中顔をこわばらせている拾来を、人は怖がったが、実は彼の方こそ人が怖かったのだ。（《小鲍庄》/佐伯慶子訳）

この場合の“是…的”は構文上要求されていない。つまり、中国語の場合は、“是”と“的”がなくても文が成り立てる。つまり、“我非常关心你”“他心里害怕人”というのは“是”の判断と“的”の確定によって伝達され、話し手の態度が強く表示していく。同じように、日本語の場合は、「のだ」がなくても文が成り立てるが、「のだ」によって二重的判断の意味を表し、確定性としての話し手の態度が伝達される。

4. 「のだ」文と“是…”文

2.1 節ですでに述べたように、文末に「のだ」で終わる文を抽出して分析してみると、「のだ」文と対応する文には、“是…的”文を除いて、“是…”文という対応例がかなり多く存在している。“是”の構文における機能は判断文を成り立つ判断詞であり、「名詞+“是”+名詞」の構造によって、「同一」（《阿 Q 正传》の作者是鲁迅）や「類型」（鲸鱼是哺乳动物）などを表す。しかし、特殊な構文において、その判断が強調的な方向に発展していく。

おもに、物事の特異性、客観性、事実性、発見性などの方面を強調する。

4.1 特殊性

「のだ」文と先行する文との関係づけは、標示として、人称名詞や指示語がよく現れてくる。指示語・人称名詞が現れなかったとしても、それを適切な位置に付け加えれば何の異常もないと考える。指示語・人称名詞に限定されるとしたら、その名詞述語は関連のものごとの「独特な性質や特徴」を表出することが多い。

次の例文の中の「最後の、唯一の希望」、「ふたつの天地、ふたつの世界」は、主語の性質や特徴の説明づけと言える。その中に、その性質や特徴に独特性が付与されることが含まれている。

(16) 这五块钱不能轻易放手一角一分，这是最后的指望！/この五円には一銭だって手をつけられない。これは最後の、唯一の希望なのだ。（《骆驼祥子》/立間祥介訳）

(17) 这跟他刚才在汽车里所预期的腐臭的湿地、血腥的酷刑多么不同呀！这是两种天地、两个世界。/さっき、車で護送されてくるとき予想していた、あの腐い、しめったブタ箱、血なまぐさい拷問とは、なんと異った世界なのだろう——これは、ふたつの天地、ふたつの世界なのだ。（《青春之歌》/島田政雄訳）

また、対応する中国語の“是”を観察すると、[指示語または人称語+判断の“是”+規定語+名詞]という形、つまり「那是/这是/他是+名詞」のような形式が一般的であり、名詞が形容詞などで修飾されるのも特殊性のあらわれである。

4.2 客観性

物事に対して話し手自身の観点からその性質を判断する場合は、つねに「Nなのだ」という形を使う。文の内容は客観的なものであるが、判断の姿勢は主観性・評価性傾向が強いように思われる。同様に、対応する中国語には、判断詞“是”を副詞によって限定している。

(18) 生活嘛，本来就是这个样子。/生活とは、本来こんなものなのだ。（《我的父亲邓小平(2)》/長堀祐造訳）

(19) 汽车与牛车，彩电与竹篓，这就是当今中国的特色。/自動車と牛車、カラーテレビと竹籠、これこそ現代中国の象徴なのだ。（《我的父亲邓小平(2)》/長堀祐造訳）

(20) 作为对于“骂誓”的反弹，也许这项功课不是完全不可以理解的。这是一种神经战，一种神经对神经的抗议。/「呪い」への反撥として、この儀式は理解できなくはない。いわば一種の心理戦、心理的抗議なのだ。（《活动变人形》/林芳訳）

「のだ」の使わない文と比較してみる。「生活とは本来こんなものだ。」「これこそ現代中国の象徴だ。」「いわば一種の心理戦、心理的抗議だ。」というような形式で表すと、客観的な性質を述べていると見える。聞き手への伝達とは言えるが、話し手の主観性が「のだ」の使う

文よりずっと低いと考える。

この種類の「のだ」文の中国語の対応するものは“就是”という形式が多いと見られる。この“就是”は、「修飾・被修飾」の構造である。“就”は話し手の伝達意図によって付け加えられ、日本語の「のだ」の働きと同じ、文の主観性を高める働きを持っている。

他に、中国語の“即是”“便是”が対応することが多い。これらは類似した点は話し手が主観的にものごとの性質を表すのである。

(21) 不必再想谁是谁非了，一切都是天意，他以为。/もうこれからは二度と人を恨ま
まい。なにもかも運命だったのだ。(《骆驼祥子》/立間祥介訳)

(22) 此即是美国的如意打算。/これこそがアメリカの意向だったのだ。(《我的父亲
邓小平(2)》/長堀祐造訳)

(23) 我的生命，我的一生，我的原来的老家与现在的家便是惩罚的产物，惩罚的体现。
/私の生命と生涯、生まれた家と現在の家庭は天罰の所産であり、その証なのだ。
(《活动变人形》/林芳訳)

(24) 她们害怕革命，对解放的临近充满恐惧，这本身便是地主的阶级本性。/彼女らは
革命と解放の到来を恐れる、これは地主階級の本性なのだ。(《活动变人形》/林芳訳)

(25) 战胜了刘四便是战胜了一切。/劉親方に勝ったことは、すべてに勝ったことな
だ。(《骆驼祥子》/立間祥介訳)

こういう場合の“就是”“即是”“便是”の性質について、張(2001)は副詞の“就”“即”“便”が“是”を修飾して、肯定の語気を確認・強調すると指摘した。つまり、日本語における主観的表現は文末のモダリティ形式を使うのに対して、中国語に常に副詞によって判断の“是”を修飾する形をとる。

4.3 事実性

中国語に実現された動作の関連側面(方式や状態など)を強調するには“是…的”文がよく使われるが、事柄の原因・目的などを強調するときに、“是…的”ではなく、よく“是”に対応する。次の二例のように、「ためなのだ」の形で、「是叫」(目的)・「是因为」(原因)と対応している。

(26) 参加革命并不是叫咱们去死，而是叫咱们活——叫咱们活得更更有意义。/革命に参加
するのは、決してぼくらを死なせるためではなく、むしろ生かすためになん
だよ——ぼくらを、より有意義に生かすためなのだ。(《青春之歌》/島田政雄訳)

(27) 她黄瘦、衰弱，年纪不大已经有了深深的驼背——这是因为长期住监狱和受了严重
刑伤的缘故。/まだ三十三歳だというのに、もう腰がまがってしまっている——これも
長い監獄生活と、残酷な拷問を受けたためなのだ。(《青春之歌》/島田政雄訳)

ここで、中国語の“是…”文は、「“是”+動名詞文」の構造であり、述べていること柄の一

側面、すなわちその真実性を強調する。“不是…而是…”の構造に明らかに示すように、ある内容を否定しながらそれと対立する本当の内容を提示する。この点で、日本語に非常によくみられる「…のではなく、…のだ。」の文型に対応する。両方とも、事柄の事実性を提示して強調する。また、物事の背後の事実を強調するには、具体的に「目的」「原因」などに分けられる。

4.4 発見性

日本語の「のだ」文が発見という意味を表すことができる。それに対応する中国語の“是…”文も発見を表すことができる。

(28) 他一开说,把我吓了一跳。原来开宗明义,是讲男女的事儿。/ぼくはびっくりした。

なんと、のっけからそのものずばり男女のことだったのだ。(《棋王》/訳者不祥)

(29) 这形象映在良材眼里好一会儿,他这才憬然觉到,原来是祝姑娘和婉小姐。/しばらくのあいだ、見るともなく眺めていて、良材ははっと気がついた。祝姑娘と婉卿だったのだ。(《霜叶红似二月花》/立間祥介訳)

(30) 他原来是个自私的、平庸的、只注重琐碎生活的男子。/もともと、かれは、利己的な俗物で、ただ、こまごまとした生活にのみ、気をつけている男だったのだ。(《青春之歌》/島田政雄訳)

上の例は、「発見」の意味で、形式上「だったのだ」と“原来是”と対応する例である。発見された情報を表すには、中国語の“原来是”という「副詞＋“是”」の形式が一般的である。日本語のほうは常に「だったのだ」の形で過去に知らない情報を提示する。張(2001:668)は、副詞としての“原来”は「旧情報が今から分かっている」と指摘した。「発見」内容を強調するとき、“原来”が重要な役割を果たしている。“原来”がないとしたら、「発見性」が消えてしまう。その反対に、例(31)に示すように「のだ」が「もともと」という陳述副詞と共用する場合もあるが、「だったのだ」で表すことが共通である。二重テンスの形によって旧情報が今から発見・気付く効果をもたらし、さらに情報を強調する。

5. おわりに

中国語の“是…”文と“是…的”文と、対応する日本語訳文の「のだ」文とは、伝達意味には類似点があるが、それぞれの構文上の特徴が異なっている。

“是…的”文によって方式や状態などが明らかに焦点となるが、「のだ」文によって焦点的な情報を提示する場合は一定の制限があり、前文脈がないと容易に判断できない。また、一般性特徴を提示するには“是…的”文と「…のだ」とは共通である。確定性内容の伝達には、“是…的”も「のだ」も構文上の強く要求されていないが、“是…的”と「のだ」が使われ、確定性を強く伝達していく。

“是…”文と「のだ」文と対応する場合は、特殊性・客観性・事実性・発見性などの強調

には共通である。「のだ」文はよく陳述副詞やとりたて詞と共用するが、中国語には「副詞+“是”」によって強調的意味を表すのが判明した。具体的に、客観性をあらわすには、日本語の「のだ」文に対して、中国語に常に副詞によって判断の“是”を修飾する形をとる。発見性内容の提示には、日本語の場合は述語を過去形をとって「だったのだ」で表すことが一般であるが、中国語の“原来是”という「副詞+“是”」の形式をとって、過去に知らない情報を提示する。

総じていえば、「のだ」文と焦点・強調的“是”字文との対照研究と通じて、両方の形式・意味特徴の相違が明らかになった。“是”と対応する「のだ」文に焦点を当てて分析したものであり、高い比率を占めている非“是”字文に触れていない。その対応の中にどのような意味・形式特徴があるかについて、今後の課題にしたい。

言語資料

『中日対訳コーパス』（北京日本語学研究センター）

参考文献

日本語文献

- 奥田靖雄（1990）「説明（その1）—のだ、のである、のです—」『ことばの科学 4』、むぎ書房:173-216
- 王亜新（2004）「日本語の「のだ」文と中国語の“是…(的)”文」『21世紀言語学研究 鈴木康之教授古希記念論集』、東京：白帝社:274-293
- 徐烈炯、劉丹青著、木村裕章訳（2017）『主題の構造と機能』、日中言語文化出版社
- 杉村博文（1982）「『是……的』—中国語の『のだ』の文—」『講座日本語 12 外国語との対照Ⅲ』明治書院:155-171
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味 第2巻』、くろしお出版
- 野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』、くろしお出版
- 森山卓郎他（2000）『ここからはじまる日本語文法』、ひつじ書房

中国語文献

- 柴世森（1981）〈“是……的”句初探〉，《河北师院学报（哲学社会科学版）》第2期:93-102
- 王宏（1987）〈“～のだ”句与“是…的”句对应吗〉《日语学习与研究》第3期:13-15
- 张伯江、方梅编（1996）《汉语功能语法研究》，南昌：江西教育出版社
- 徐杰著（2001），《普遍语法原则与汉语语法现象》，北京：北京大学出版社
- 张斌（2001）《现代汉语虚词词典》商务印书馆
- 吕叔湘（2002）《吕叔湘全集第05卷 现代汉语八百词》，辽宁教育出版社
- 刘月华（2004）《实用现代汉语语法》商务印书馆
- 金立鑫（2005）〈“是……的”、“是”和句尾的“的”的功能及其句法条件〉《对外汉语教学虚词辨析》北京大学出版社:46-61